

小茄子（コナスビ）

コナスビという名が付けられているがナス科ではない。サクソウ科オカトラノオ属の多年草。全国の低地から山地の原野、道端、庭、畑、草原などに普通に見られる。茎は5～20cmで紫褐色を帯び株元から地を這うように四方へ広がる。茎や葉全体に軟毛がある。葉は対生、有柄、広卵形で10～25mm、全縁で先は短く尖る。花期は5～6月。葉腋に、径5～7mmほどの黄色い小花を1個ずつ付ける。花柄は3-8mmで、合弁花であるが花弁が5つに深く切れ込んでいるため5枚のように見える。花が終わると下方を向き小さな丸い実をつけるが、この果実が、ふくらみ始めた茄子に似ているということで小茄子の名が付けられた。果実は4～5mmの球形の蒴果で、熟すと裂けて多くの種子を散らす。

紀元前7世紀から紀元前3世紀ころ、古代ギリシアにマケドニアという王国があった。マケドニア王国が最も栄えたのはアレクサンドロス3世（大王）の治世であった。彼は若くしてギリシアからインド北西部に至る大帝国を建設した戦術・戦略の天才であった。

そのアレクサンドロスには多くの側近護衛官が従っていたが、その中の一人にリュシマコスという男がいた。リュシマコスは勇猛な戦士であると同時に思慮深い男であり、軍の統率に優れた力を発揮していた。

アレクサンドロスが32歳で亡くなると、護衛官たちは帝国を分割統治し、リュシマコスはバルカン半島東部のトラキアの王となり、ディアドゴイ戦争を経て王としてトラキアを含むマケドニアを支配するようになった。

リュシマコスがトラキア王の時のことであった。戦役から戻り祝勝の宴を開いていると突然何頭かの牛が暴れだした。そのうち一頭の牡牛が猛り狂って、止めに入った者どもを押し退けてリュシマコスへと迫ってきた。周りの者たちは必死に牛を止めようとしたがリュシマコスは慌てず、自らが座っている周りにある黄色い花の咲いた草を両手で千切れるだけちぎって牡牛の鼻先へと振り撒いた。するとあれほど猛り狂っていた牡牛が

須藤 健一

鼻を左右に数回振りひねると急におとなしくなった。周りの者たちは牡牛を鎮めたリュシマコスの落ち着いた勇敢さを褒め称えた。

リュシマコスが牡牛の鼻先へ振り撒いた草が、ハーブとしても用いられることがあるヨーロッパ原産の *Lysimachia nummularia* L. (和名コバンコナスビ) ではなかったかと思えるが、今では日本でも北海道や一部の地域に帰化している。その属名の *Lysimachia* はこのトラキア王のリュシマコス (*Lysimachos*) を称えてリンネが名付けた。

一方、日本の在来種に、コバンコナスビと同属別種のコナスビがある。学名を *L. japonica* Thunb. と言い、これはリンネの弟子であるツンベルクが日本の出島に滞在した折に、将軍への謁見のため江戸入りしたが、その際に箱根で採集し、命名したとされる。

日本のどこにでも生えているコナスビであるが、学名から「*japonica* 日本の」「マケドニア王リュシマコス」、さらに、アレクサンドロス大王や古代ギリシアへと想像の翼が広がっていく。

